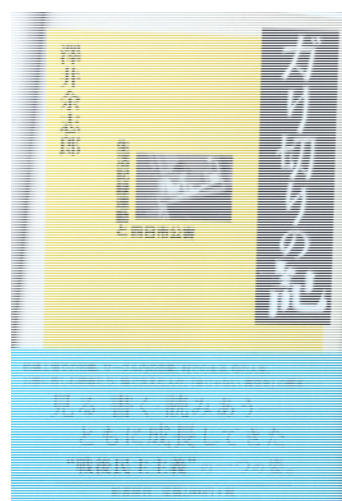


ガリ切りの記

四日市公害の「語り部」沢井余志郎さんが12月16日午後、87年の生涯を終えた。つい先日、「青い空」は戻ったか、と沢井さんらをレポートしたばかりである。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

沢井さんには2度ほどお世話になった。1度目は、1999年の日本環境会議・名古屋大会のときだ。大会の事務局長を務めていたが、慣れない大役で環境団体との「調整」などに苦労した。そんなとき名古屋に出て来られ、いろいろ「助言」してもらったことが忘れられない。にこやかな表情のなかに、風格と厳しさを感じたものだ。

2度目は2007年7月の四日市公害判決「35周年記念の集い」のときだ。途中から臨時に事務局長になり、四日市に何度か通った。沢井さんも準備会合に来て、細かなことまで助言してもらった。長年の経験により、事務的な仕事は手馴れたものだった。現地との調整、手配に苦労していたので、どれだけ助けてもらったか。ほんの少しと一緒に仕事をさせてもらい、沢井さんの人柄、温かさに触れることができた。レポートにも書いたが、私が寺西俊一さんと司会を務めた「集い」の最後、沢井さんに発言してもらったが、今でも心に残っている。翌日の現地視察では、沢井さんの丁寧な案内に感心した。



表題と写真は、2012年に影書房から出版された沢井さんの著書である。「ガリ切り」というと、若い人には通じないと思うが、コピー機が普及する前には、ガリ版にガリ切りして(原稿を書いて)、ビラを印刷したものだ。信州大学時代、学生自治会などでガリ切りをしたことがある。不器用なため、下手くその出来であったが。

表紙の写真は、若き日のガリ切りに励む沢井さんだ。この本の「はじめに」の最初だけ紹介したい。他人から、「なんで、公害にこだわってしんどい語りべなんかを続けているんですか」などと聞かれることがある。「これこれだから----」とすぐに返答できるものをもちあわせていないので、そういう場合、正直返答に困る。しかし、まず言えるのは、「かつて紡績工場で女子工員たちと生活記録をやってきたから----」である。生活記録運動がなかったら、今の自分は存在しないと思っているし、何よりも、その生活記録運動で私は人間として成長できたと、女子工員仲間たちに感謝している。

(2015年12月18日)